

小学校外国語教育におけるモジュール学習の開発と 授業実践：「お寿司屋さんごっこ」に焦点をあてて

堀文人 (HORI Ayato)
鶴岡市立朝暘第五小学校

石濱博之 (ISHIHAMA Hiroyuki)
盛岡大学

Abstract

The purposes of this paper are to develop module learning for elementary school foreign language education, and to teach English to children using module learning in C Elementary School. We tried to have a forty-five-minutes lesson and to have three fifteen-minutes lessons in a class. The topic was “Sushi Make-Believe”.

Our research was carried out in November 2018, and 39 five-year elementary school students participated. After teaching, we investigated how much the children had understood sushi words, and how they reflected on the lessons. The lessons containing module learning were effective and the children enjoyed the “Sushi Make-Believe”.

We should introduce module learning into foreign language activities and foreign language classes at the elementary school level.

(キーワード：モジュール学習，ごっこ遊び，外国語活動)

1. はじめに

1.1 小学校外国語教育の現状

2008（平成20）年3月に学習指導要領が告示され、小学校高学年（5年生・6年生）で外国語活動が必修化された。これに依り高学年（第5学年・第6学年）で外国語活動がそれぞれ35時間の年間授業時間数に定められた。小学校における外国語活動は2011（平成23）年度から完全実施となった。一方で、1. 音声中心の学習のため中学校での文字の学習に円滑に接続されていない、2. 日本語と英語の音声の違いや文構造の学習において課題がある、3. 高学年ではより体系的な学習が求められる、ことなどが

課題として指摘されていた。

2017年（平成29年）3月に告示された新学習指導要領では、課題や成果、及びグローバル化が急速に進む今日の社会の状況を踏まえて、小学校中学年から外国語活動を導入し「聞くこと」「話すこと」を中心とした活動を通じて外国語に慣れ親しみ、外国語学習への動機づけを高めたうえで、高学年から発達の段階に応じて段階的に文字を「読むこと」「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うと共に、中学校への接続を図ることを重視するようになった。

本稿では、高学年の年間70時間単位の授業をどのように確保するかを考慮して、モジュール学習の開発とその効果について検証し報告する。

2. モジュール学習

2.1 モジュール学習

モジュール学習とは学習形態のことであり、10分、あるいは15分などの短い時間を単位として学習に取り組む形態である。そして、文部科学省によれば、45分の授業を15分のモジュール（構成要素）に分け、それが3つ集まって1回分の授業とカウントすることからきている。他の言い方では帯学習ともいい、始業前の毎日15分を充てた時、週の時間割表で細い（短い）帯のように並ぶことから、帯学習と呼ばれている。現状では朝読書や算数ドリルなども含めれば、日本では既に実施している学校も少なくはない。2017年（平成29年）3月に告示された学習指導要領では、モジュール学習の体制を整えた上で実施すれば正式な授業時数として数えることができるとしている。

2.2 小学校外国語（英語）教育におけるモジュール学習の実践例

外国語活動におけるモジュール学習の実践例を概観する。

山形県長井市立伊佐沢小学校における実践例「伊佐沢モデル」（梅崎，2017）は、文部科学省の教育課程特例校の指定を受け、専属の外国語指導助手（ALT）がいる英語教育のモデル校である。モジュール学習の内容は、① 毎朝8時45分から10分間、② 黒板に食べ物や動物の絵を示し“*What's this?*”と問いかけること、を実施していた。その他、モジュール学習によって身についた英語力を基に他の教科や活動を英語で学ぶ「イマージョン教育」や午前中の4時間にわたって英語を使う「オールイングリッシュデイ」の実施、「スカイプ」を用いたネイティブスピーカーとの英会話を試験的に導入することなどに取り組んでいた。

次に、山形県鶴岡市立朝暘第五小学校における実践例（朝暘第五小学校，2017）のモジュール学習の内容は、① 昼の清掃と5校時の間の15分間（週4日間）、② 45分授業で学ぶ語句やフレーズの事前練習や復習、を実施していた。昼間に実施する理由は、朝にモジュールの時間を新たにとることによって子どもたちの生活リズムが崩れてしまうこと、時にハイテンションになることもある英語の学習を朝一番に行うことでその後の授業が騒がしくなるのではないかという懸念の声があった理由からである。最終的に、始業を5分早め終業を10分遅らせるという方法を選択した。その他、月曜日の放課後に行われる職員終礼では最初の数分間を使って英語教育に関する話し合い

や研修なども実施したと報告されている。

秋田県由利本荘市立由利小学校における実践例（由利小学校, 2018）においては、「45分+23分×2」という独自のモジュールを導入していた。モジュール学習の内容は、① 朝8時から23分間（火、金曜の朝）、② 45分授業と同じように「課題・活動・振り返り」がある学習、を実施していた。45分間の授業は23分のモジュールを受けて編成されており学習の流れはほぼ変わらない。ただし、ネイティブスピーカーの発音を聞きながらの練習や会話の過程で気になったことをALTの先生に質問をして修正していく場面もある。1回目での気付きを2回目に生かせるように授業が組み立てられていた。

名城大学が小学校と連携した実践例（松井・藤原, 2017）においては、小学校英語活動としてのモジュール型の算数 CLIL 実践を実施していた。CLIL とは内容言語統合型学習であり、外国語を通して算数や理科などの教科内容を指導する指導方法である。モジュール学習の内容は、① 朝の学習タイム（年間10回程度）、② 計算問題を解き、英語で回答をする、ことであった。

彦根市教育課程特例校における実践例（山田・藤本, 2017）によれば、彦根市では独自の短時間学習教材を使用してモジュール学習を行っている。その内容は、① 朝活動や5校時の始業前の5分間（毎日）、② 1レッスン5分弱のビデオを1週間同じ内容のものを繰り返し視聴していた。使用されている短時間学習用教材は、彦根市のゆかりに応じた事柄を活用して作成されている。例えば、「なおすけ & ペリーの Can Do English」では1年間学習をすることで英語を使って彦根城の紹介ができるようなレッスンが設定されていた。

2.3 小学校外国語（英語）教育におけるモジュール学習の利点

外国語（英語）教育においてモジュール学習を活用した場合、実践事例の知見から3つの利点が挙げられる。

第一に、授業時数の確保である。ホールら（2018）によれば、45分間の授業と計45分間のモジュール学習（3つの異なった学習活動）においては、学習の定着では大きな差は認められなかったとしている。これは授業時数の増加により、45分という1単位時間を確保することが難しくなっているという現状の打開策となり得る。更に、実践している学校によっては15分ほどの短時間学習の方が児童の集中力が持続し、次の時間の活動にも移りやすくなるという肯定的な意見もある。

第二に、教員の英語に対する苦手意識の緩和である。岡部（朝暘第五小学校, 2017）によると、モジュール学習を通して英語に触れる機会が増えることにより、児童だけではなく教員も英語に慣れることも取り組みの大きな成果として挙げられている。また、学級担任がモジュール学習を主導することでこれまで見えなかった子どもの一面や相手のよさを認め合う機会ができた結果、よりよい学級作りのチャンスを得ることができたという意見もあった。

第三に、学校の実態に応じて、モジュール学習を実施できる。タイミング、実施時間、内容は学校によって様々である。児童の数や指導をすることのできる教師の数などに応じて柔軟な学習形態を取ることができることから、学校で活用することが可能である。

2.4 小学校外国語（英語）教育におけるモジュール学習の留意点

外国語（英語）教育においてモジュール学習を活用した場合、3つの留意点を示す。

第一に、誰もがモジュール学習を実施できるわけではない。岡部（朝陽第五小学校，2017）によれば，小学校の英語教育において子どもの前で英語を話すことに対する教員の羞恥心が障壁になっている。そして，場合によっては毎日の15分間の授業の準備や実施が教員の負担になってしまうことも考えられる。そのため誰でもモジュール学習を効果的に簡単に行えるような教材の準備や指導案の準備が重要となる。

第二に，教材の準備が難しい。眞坂（朝陽第五小学校，2017）によれば，モジュール学習を始めるにあたって最初に取り組むべきことは教材の準備である。複数の学級が同時刻に学習を開始するために，それまで使用していた分の教材だけでは足りなくなる問題が挙げられた。また，教材を作るために教員の負担がさらに増加してしまう恐れもある。

第三に，学びのある学習になることが難しい。眞坂（朝陽第五小学校，2017）によれば，モジュール学習において注意すべきことは，単に「ゲームをして楽しい」で終わらないような内容にすることであると指摘している。児童が学習の見通しを持ち，その時間に何ができるようにしなければいいのかというねらいがわからないままモジュール学習を進めてしまうと学びのない時間となる。効果的なモジュール学習を推進するためには，すべての時間で必ず「本時のねらい」を設定することが重要である。

これまでに述べた利点，留意点を踏まえて実践を通してモジュール学習の効果を実践的に検証する。

3. 研究の目的

本研究の第一の目的は，外国語活動におけるモジュール学習の授業開発である。

本研究の第二の目的は，外国語活動におけるモジュール学習を運用した際の授業の効果（聴解力と児童の情意面）を明らかにすることである。

4. 授業実践の内容

4.1 授業計画と授業展開

本実践を遂行する場合，石濱・渡邊（2013）が授業実践した「お寿司屋さんごっこ」の展開例を参考にした。その際，モジュール学習を通して寿司英語とその注文の仕方を学びながら課題を遂行する授業構成とした。そして，授業実践は酒田市立C小学校で45分の授業を1回，15分間のモジュール学習を3回と計2時間の授業に取り組んだ。朝活動の時間に実施するのは「忙しい」という理由で困難であったために，外国語科以外の授業の初めの15分間に導入した。また，「お寿司屋さんごっこ」の本単元では本来4時間構成で授業を行い，1回目の物を注文してその会計までの表現を取り扱うこととしたが，2時間内の制約なので物の注文のみを取り扱った（表1）。

授業展開は、45 分間の授業では本単元の目標である「お寿司屋さんごっこ」のモデルを示し、児童が授業の目標をイメージできるように組み立てた。また、「お寿司屋さんごっこ」を児童がうまくできるように、児童同士または教師とのコミュニケーションの場を多く設け、会話しやすい場面を設定するように配慮した。指導案は 45 分授業 1 回分、15 分間のモジュール学習 3 回分を作成した。

表 1

「お寿司屋さんごっこ」のモジュール学習の枠組み

時間	内容
(1) 平成 30 年 11 月 26 日 (月) 4 限 (45 分)	注文方法を知ろう。
(2) 平成 30 年 11 月 27 日 (火) 4 限 (15 分)	寿司の名前を覚えよう。
(3) 平成 30 年 11 月 28 日 (水) 3 限 (15 分)	注文をしてみよう。
(4) 平成 30 年 11 月 29 日 (木) 3 限 (15 分)	お寿司屋さんごっこをしよう。

4.2 モジュール学習での活動の内容

本研究で行ったモジュール学習での活動は以下の通りである。ここでは活動の名称とその活動を行うねらいを表 1 に対応させる。

(2) パズルゲーム (11 月 27 日実践)

本活動では、物の注文方法を聞く力と表現する力をつけることをねらいとした (写真 1)。

(3) グループピングゲーム (11 月 28 日実践)

本活動では、物の注文方法を聞く力と表現する力をつけることをねらいとした。

(4) お寿司屋さんごっこ (11 月 29 日実践)

本活動では、練習して表現力を使って、役割分担をして集団で表現をすることとした。写真 1 パズルゲームをしている様子「聞くこと」から「話すこと」への円滑な接続を促すように、「お寿司屋さんごっこ」の注文方法の仕方ができるように計画した。



写真 1 パズルゲームをしている様子

5. 授業実践の成果

5.1 参加者

参加者は、S 市立 C 小学校の第 5 学年の児童 39 名である。ただし、事前では児童 1 名が欠席をして 38 名となり、事後では 39 名であった。

5.2 調査方法

45 分授業 1 回、15 分間のモジュール学習 3 回の合計 2 時間分の授業を実施する事前と事後で「聞くこと」に関する寿司英語の理解度を検証する。そして、授業で取り扱う寿司を 5 個、そうでない寿司を 5 個の計 10 個 (問い) を選択した。

2時間分の授業終了後に、児童の「振り返りカード」に依る、学習の振り返りを実施した。「振り返りカード」は、「楽しさ」、「ためになる」、「話しかける」、及び「わかる」の情意面と自由記述（授業の感想）で構成されている。

5.3 分析方法

授業の事前・事後による「聞くこと」を中心とした寿司英語の理解度の分析は、対応のある二要因分散分析で処理した。また、「振り返りシート」における情意面の分析は単純集計で検証し、自由記述の分析はテキストマイニング（IBM SPSS Text Analytics for Surveys Ver. 4.0.1）を用いた。

6. 結果と考察

6.1 寿司英語調査の結果

6.1.1 参加者全体の結果と考察

表 2

寿司英語に関する記述統計量

項目	N	事前		事後	
		M	S.D.	M	S.D.
取り扱った寿司	38	3.53	.76	5.00	.00
取り扱わない寿司	38	2.42	1.06	3.68	.84

表 3

寿司英語に関する二要因分散分析の結果

項目	タイプIIISS	df	MS	F	p	η_p^2
取り扱い有無	55.68	1	55.68	94.44	.00	.72
誤差(取り扱い有無)	21.82	37	.59			
事前事後	71.16	1	71.16	129.43	.00	.78
誤差(事前事後)	20.34	37	.55			
取り扱い有無×事前事後	.42	1	.42	.82	.37	.02
誤差(取り扱い有無×事前事後)	19.08	37	.52			

表 2 は寿司英語に関する記述統計量であり、表 3 は寿司英語に関する対応のある二要因分散分析の結果である。表 3 によると、「取り扱い有無」に有意に差があり、効果量も大きい ($F(1, 37) = 94.44, p < .01, \eta_p^2 = .72$)。また、「事前事後」においても有意に差があり、効果量も大きい ($F(1, 37) = 129.43, p < .01, \eta_p^2 = .78$)。「取り扱い有無」と「事前事後」において、それぞれに主効果があったといえる。しかしながら、「取り扱い有無」と「事前事後」においては、交互作用はみられなかった ($F(1, 37) = .82, p = .37, \eta_p^2 = .02$)。「取り扱い有無」と「事前事後」に主効果があった点については、「お寿司屋さんごっこ」に積極的に取り組ませるために、言語材料を含む学習内容を積み上げ

た結果，寿司英語の修得があったといえよう。即ち，取り扱った寿司英語に学習効果があり児童は役割分担をしながら自信をもって「お寿司屋さんごっこ」に取り組んだ結果であろう。また，事後に有意差がみられたことはモジュール学習を通して毎日英語に触れ，練習を重ねることができたからである。しかしながら，交互作用に有意な差がないことは，問題の内容及び作成の仕方に検討の余地があるかもしれない。

取り扱わない寿司英語が正答になる設問では，選択肢の中に取り扱った寿司単語を入れて消去法で回答できるようになる場合もあった。また，取り扱った寿司英語に関しても事前の調査で5問中3問が90%以上の正答率を示しており，取り扱う寿司英語を考慮し選択する必要があったと考えられる。

表 4

事前・事後における寿司英語の正答数・正答率

授業で扱った寿司	事前(N = 38)		事後(N = 39)	
	正答数	正答率	正答数	正答率
マグロ	7	18.4	39	100
タコ	36	94.7	39	100
レインボーロール	36	94.7	39	100
いくら	17	44.7	39	100
たまご	38	100	39	100
取り扱わなかった寿司	正答数	正答率	正答数	正答率
カニ	3	7.9	20	51.3
カリフォルニアロール	17	44.7	35	89.7
コーン	36	94.7	38	97.4
ウナギ	10	26.3	11	28.2
焼サーモン	26	68.4	39	100

表 4 は事前・事後における寿司英語の正答数と正答率である。事前・事後における授業で取り扱った寿司英語の正答の変容について考察する。事前に50%以上の正答だった寿司は，「タコ」，「レインボーロール」，及び「たまご」であった。「タコ」については“octopus”が既知であり，「たまご」は“egg”が日本語として定着していると考えられる。「レインボーロール」は，“rainbow”という単語からカラフルな色の寿司を選んだと予想できる。事前に50%以下の正答だった「マグロ」と「いくら」については，事後では100%の回答となっており，授業の成果であるといえるだろう。次に，事前・事後における授業で取り扱わなかった寿司英語の正答の変容について考察する。

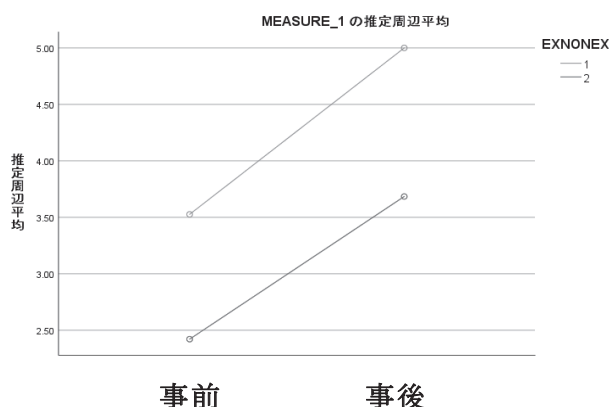


図 1 参加者全体における寿司英語の推移

事前に 50%以上の正答だった寿司は「コーン」と「焼サーモン」だった。「コーン」については“corn”が、「焼サーモン」については“salmon”が日本語として定着していることが考えられる。事前に 50%以下の正答であった寿司の中で「カニ」と「カリフォルニアロール」は事後で 50%以上の正答を得た。この 2 つの寿司英語に関しては事後の問題の 4 つの選択肢のうち、授業で扱うものと扱わないものが 2 つずつのどちらも消去法で回答し、同程度の正答率の向上になったかもしれない。事前でも事後でも 50%以下の正答であった寿司英語は「ウナギ」であった。「ウナギ」という寿司は児童にとって親しみのない単語であったかもしれない。更に、多くの児童が、選択肢の中の「ウナギ」の写真を見て「ウナギ」と判別できなかったと考えられる。

6.1.2 情意面に関する結果と考察

すべてのモジュール学習の終了後（事後）に、情意面に関する問いを児童に実施した。表 5 は情意面に関する単純集計の結果である。表 5 によれば、児童は授業に肯定的な態度で取り組んだ。

表 5

情意面に関する単純集計の結果 (N = 39)

(1) 楽しさ	回答数	%	(3) 話しかける	回答数	%
楽しかった	39	100	できた	34	87.2
少し楽しかった	0	0	少しできた	5	12.8
どちらでもない	0	0	どちらでもない	0	0
あまり楽しくなかった	0	0	あまりできなかった	0	0
全く楽しくなかった	0	0	全くできなかった	0	0
(2) ためになる	回答数	%	(4) 聞き取る	回答数	%
ためになった	38	97.4	分かった	34	87.2
少しためになった	1	2.6	少し分かった	5	12.8
どちらでもない	0	0	どちらでもない	0	0
あまりためにならなかった	0	0	あまり分からなかった	0	0
全くためにならなかった	0	0	全く分からなかった	0	0

特に、(1) の「楽しさ」という面では児童全員が「楽しかった」と回答していることから、15 分間の授業で実施したゲームの活動や「ごっこ遊び」が効果的であったといえる。児童にも親しみのある寿司を題材にすることで児童のもっと知りたい気持ちを引出し、学習意欲に繋げることができた。また、寿司の日本語と英語での表現の仕方の類似点や相違点に気付く児童も多く、音声を通して日本と他国の文化の違いを知る機会にもなったと考えられる。(2) の「ためになる」という面からは 97.4%の回答により、児童が毎日の 15 分間の学習に意欲的に取り組めたようだ。(3) の「話しかける」という面には、多くの児童が肯定的な回答を示した。これは、モジュール学習の際に実施したゲームの活動を通して楽しみながら相手に話しかけることができた結果であろう。(4) の「聞き取る」という面においても多くの児童が肯定的な回答をした。「お

「寿司屋さんごっこ」の際に相手の話したことを聞き取って自分の言いたいことを伝えることができていることを示した結果であろう。即ち、児童が概ねモジュール学習に意欲的に取り組んだとみなしてよいだろう。

6.1.3 自由記述の結果と考察

図2は、自由記述内で5回以上記述されていた言葉を選定し、その関連用語（5未満のものも含める）を取り入れ、共通する回答同士を結んだものである。「寿司」から多くの共通する回答が出ていることがわかる。児童に親しみのある寿司を題材にしたことにより「英語」「わかる」「楽しかった」の興味関心を引き出すことができた。また、「15分間」「毎日」「わかる」の結びつきが強く、15分間という短い時間で学習を行うことによって飽きることなく、学習を推進することが考えられる。児童は、モジュール学習を通して外国語（英語）の学習を進めていくことを肯定的・好意的にとらえているとみなしてもよいだろう。

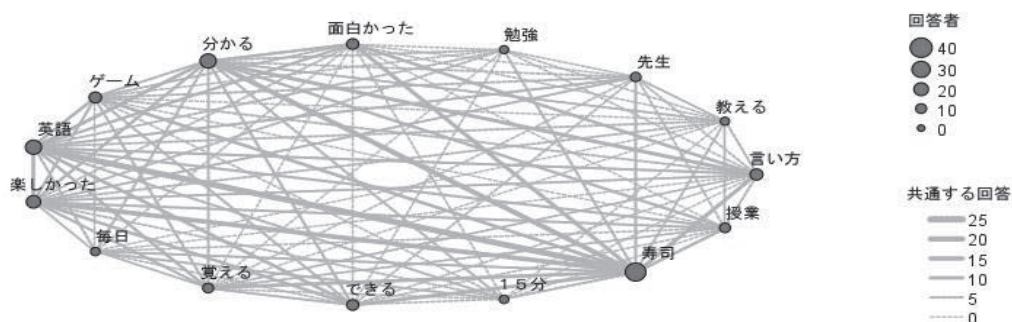


図2 自由記述（授業の感想）

7. 結論

7.1 教育的示唆

学習効果と情意面、及び児童の自由記述から、小学校における外国語（英語）教育におけるモジュール学習を活用してもよいだろう。

第一に、モジュール学習をうまく活用することにより、授業時数の確保のための負担が少なくなる。モジュール学習の枠組みを作成し、学校全体で取り組むことができれば朝などの隙間時間を有意義に活用できる可能性はある。モジュールで学習を行った後の授業で普段より大きな声で音読がなされた。各学校の実態に応じてモジュール学習を設定してもよい。

第二に、児童の外国語（英語）に対する苦手意識を軽減できる。45分間の授業形態は大人が思っている以上に児童の負担が大きい。15分間で実施することで飽きることなく、集中して外国語（英語）を学習する可能性がある。子どもの Attention Span（注意域）を考慮して、モジュール学習の推進は大切である。更に、モジュール学習で生まれた疑問や学びを45分間の授業に繋げていくことによって、効率的に外国語（英語）指導を推進できるであろう。

7.2 今後の課題

今回の授業実践をした後に、3つの課題を挙げる。

第一に、使用する教材の準備である。モジュール学習の限られた時間では教材の開発が不可欠である。モジュール学習の実施時間を学級ごとにずらすことなどの対策を取ることが効果的だと考えられる。また、教員同士で協力して教材を準備すれば、適宜利用可能になるであろう。

第二に、学級の状況に応じて実施が困難な場面もある。ゲームなどで盛り上がり、次の時間に悪影響が出てしまう可能性もある。今回の学級は、学級経営が上手くなされており、多少賑やかになっても教師の注意によって次の授業に向かうことができた。そこで、1学期や長期休み明けなど、学級が落ち着いていない時期にはモジュール学習を実施しない方がよいかもかもしれない。例えば、チャンツを聞くだけにするなどの軽い内容を実施する。即ち、学級の状況に応じて柔軟に対応しながら活用する。

第三に、題材によってモジュール学習が効果的なものとそうではないものが挙げられる。今回の単元では児童が親しみを持つ「寿司」を取り上げて授業を進めたが、単元によっては今回のような方法を採用することができない場合も考えられる。

この実践論文は、2019年（平成31年）1月25日に提出した盛岡大学文学部児童教育学科の卒業論文に加筆修正を加えたものである。

謝辞：本実践研究を実施するにあたり、S市立C小学校で授業実践と調査の場を提供していただいたことに感謝したい。そして、教職員、及び児童に感謝をしたい。

引用文献

- 秋田県由利本荘市立由利小学校 (2018). 「23分モジュールでも思考力を働かせ45分と丁寧につないでいく授業づくり」『総合教育技術』1月号 第72巻13号, 54-57.
- ホールジェームズ・菅原純也・大森有希子・金子祐輔・佐々木徹・高室敬 (2018). 「小学校外国語活動におけるモジュール型指導の充実」『岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集』第5巻, 18-21.
- 石濱博之・渡邊陽介 (2013). 「外国語活動（英語活動）に「お寿司屋さんごっこ」を導入した授業の展開とその効果～「ごっこ遊び」で扱った寿司英語と扱わなかった寿司英語の学習成果に焦点を当てて～」『JES Journal』Vol. 13, 52-67.
- 松井孝彦・藤原康弘 (2017). 「小学校英語活動としてのモジュール型の算数 CLIL 実践」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』vol. 2, 85-92.
- 梅崎勇介 (2017). 「英語モジュールで伊左沢モデル」『内外教育』11月号 第6625号, 16-17.
- 山田孝・藤本文朗 (2017). 「小学校英語必修化の現状と試みー彦根市教育課程特例校の毎日5分間学習の取組をとおしてー」『滋賀大学教育学部紀要』第67号, 7-20.
- 山形県鶴岡市立朝暘第五小学校 (2017). 「英語教科化で純増する授業時間の確保に一石二鳥のモジュール学習」『総合教育技術』2月号 第71巻15号, 30-33.